

intloop

×




High Performer
Consultant

DX推進とアジャイル開発の相性

DX推進の波はじわじわと押し寄せてきています。このプロジェクトを実施するうえで、従来のウォーターフォール型よりもアジャイル開発が有効な開発手法であるとIPA（情報処理推進機構）が推奨しています。アジャイル開発とはいったいどんなものなのか？そして、どんなことに留意しなくてはならないのか？IPAが公開している各種資料をもとにご紹介します。

ユーザー、開発ベンダー管理に携わっているプロジェクトマネージャーの方にご参考になれば幸いです。

目次

1. なぜDX推進にはアジャイル開発なのか
 2. アジャイル開発の特徴
 3. アジャイル開発のメリット
 4. アジャイル開発の留意すべきこと
- 

1. なぜDX推進にはアジャイル開発なのか

2. アジャイル開発の特徴

3. アジャイル開発のメリット

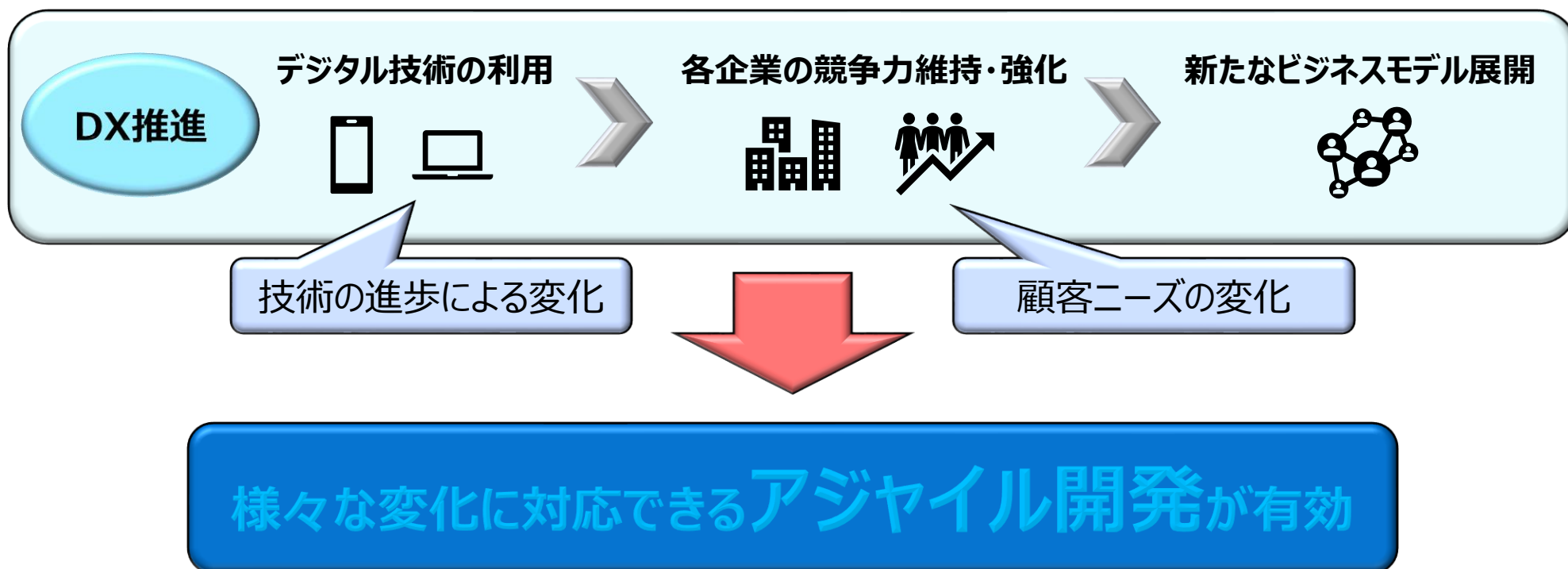
4. アジャイル開発の留意すべきこと

なぜDX推進にはアジャイル開発なのか

アジャイル開発は小単位で実装とテストを繰り返して開発を進めていくため、ウォーターフォールなど従来の開発手法に比べて課題の改善やユーザーのニーズなどに臨機応変に対応することができます。

DX推進はビジネス環境が激しく変化していく中で、デジタル技術などを活用してビジネスモデルや組織、プロセスなどを変革し、企業競争の優位性を確立することをいいます。

DX推進では、顧客ニーズの変化や不具合の発生時に素早い改善（場合により早期撤退）を繰り返す仮説検証型の反復的な開発スタイルである「**アジャイル開発**」が有効といえます。



1. なぜDX推進にはアジャイル開発なのか

2. アジャイル開発の特徴

3. アジャイル開発のメリット

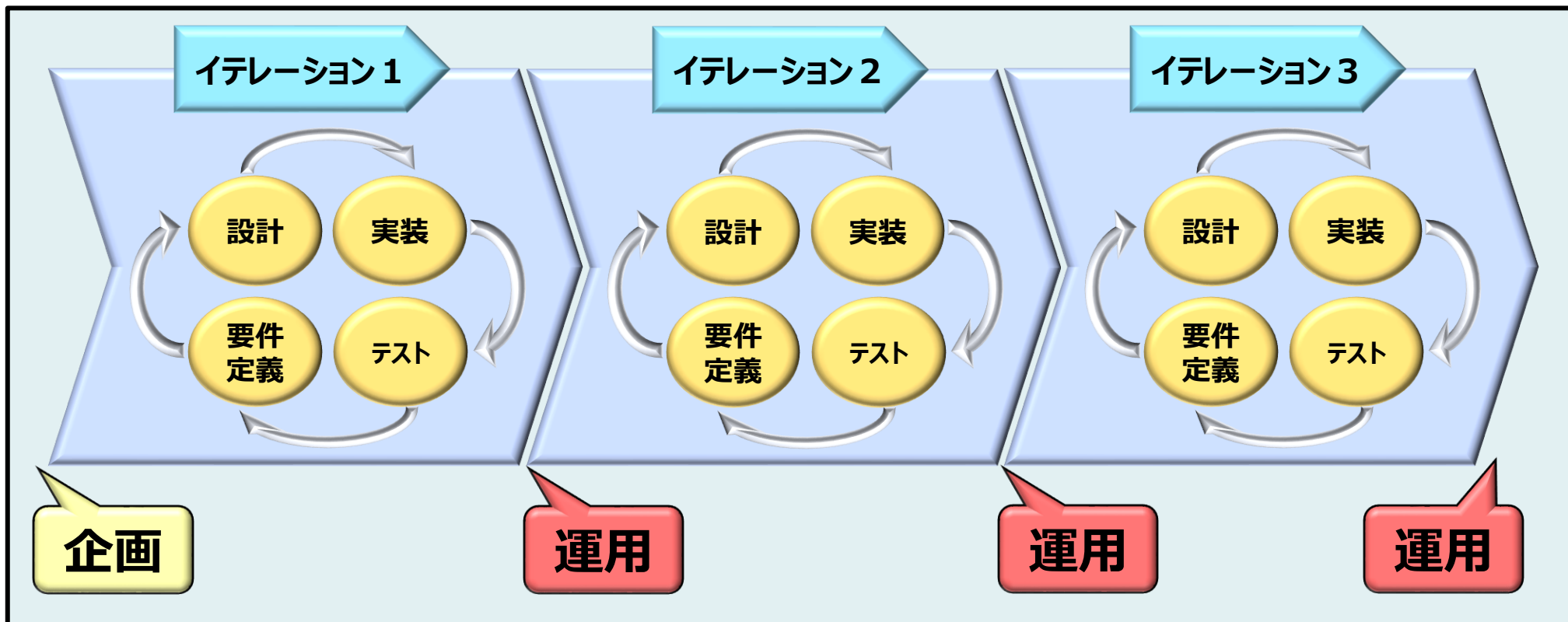
4. アジャイル開発の留意すべきこと

アジャイル開発の特徴 – 開発方法 –

アジャイル開発には「スクラム」「エクストリーム・プログラミング(XP)」「ユーザー機能駆動開発(FDD)」など複数の進め方があります。

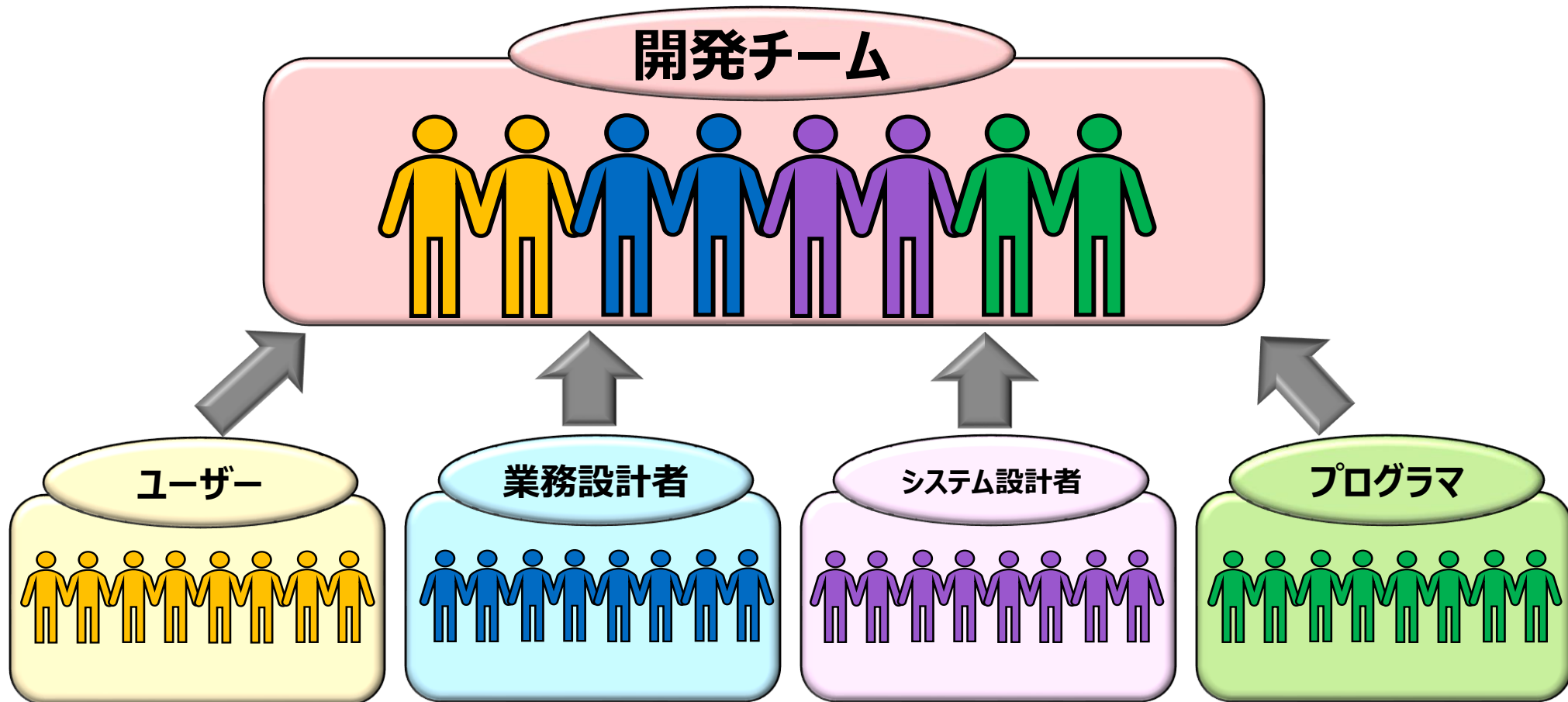
アジャイル開発は「要件定義→設計→開発→実装→テスト→運用」といった開発工程を機能単位の小さなサイクルで繰り返すことが最大の特徴といえます。

この小さなサイクルのことをイテレーションと呼び、それを何度も繰り返すことにより、効率的に目的とする機能の実現を図ります。



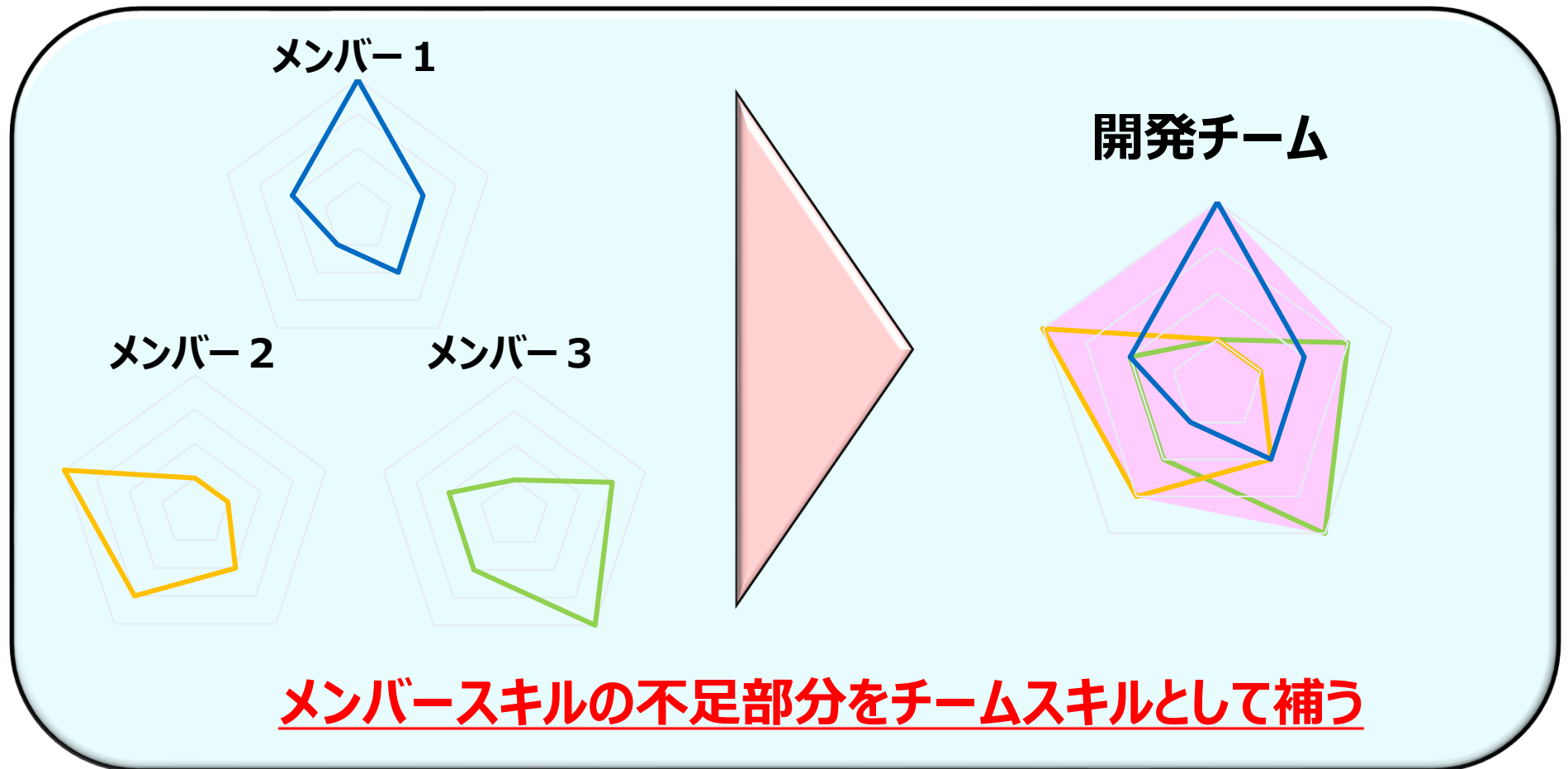
アジャイル開発の特徴 –体制–

アジャイル開発は機能横断(クロスファンクション)型のチーム体制なので、チームメンバーがその役割の違いを理解することが大切です。また、ウォーターフォール型の開発方法とは異なり、「ユーザー」「業務設計者」「システム設計者」「プログラマ」などが1つのチームとして全員が考え行動することが必要になります。



アジャイル開発の特徴 –スキル–

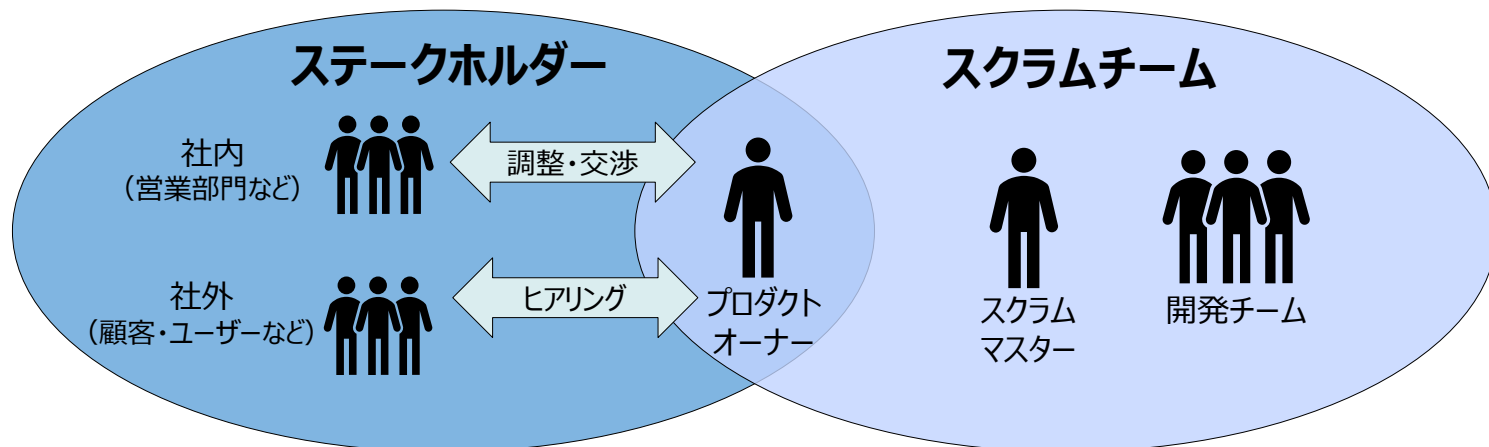
開発チームは開発プロセスを通して、完全に自律的である必要があり、プロダクトを開発するために必要なスキル全てをチームとして備えている必要があります。そのためにはメンバーの不足している知識・スキルをチームで補う形の体制を検討する必要があります。



アジャイル開発の特徴 – 役割 –

アジャイル開発の中でも代表的なスクラムでは役割を以下のように設定されています。

役割	内容	詳細
プロダクトオーナー	開発内容を決める	開発への投資に対する効果を最大にすることに責任を持ち、開発チームに機能を説明し理解してもらう責任がある。プロダクトのビジョンを示す大切なポジション。
開発チーム	開発作業に携わる	各自の強みを持ちより、チームとして互いに貢献する。自律的に行動し、プロダクトの価値を高めていくことに責任を持つ。
スクラムマスター	全体支援・マネジメント	チーム全体をマネジメントするが、コントロール型の管理を行うのではなく、あくまで「支援」という立場を意識する。開発のやり方の決定や指示はスクラムマスターではなく開発チームが行う。チーム全体が自律的に協働できるような環境を作る役割を担う。



1. なぜDX推進にはアジャイル開発なのか

2. アジャイル開発の特徴

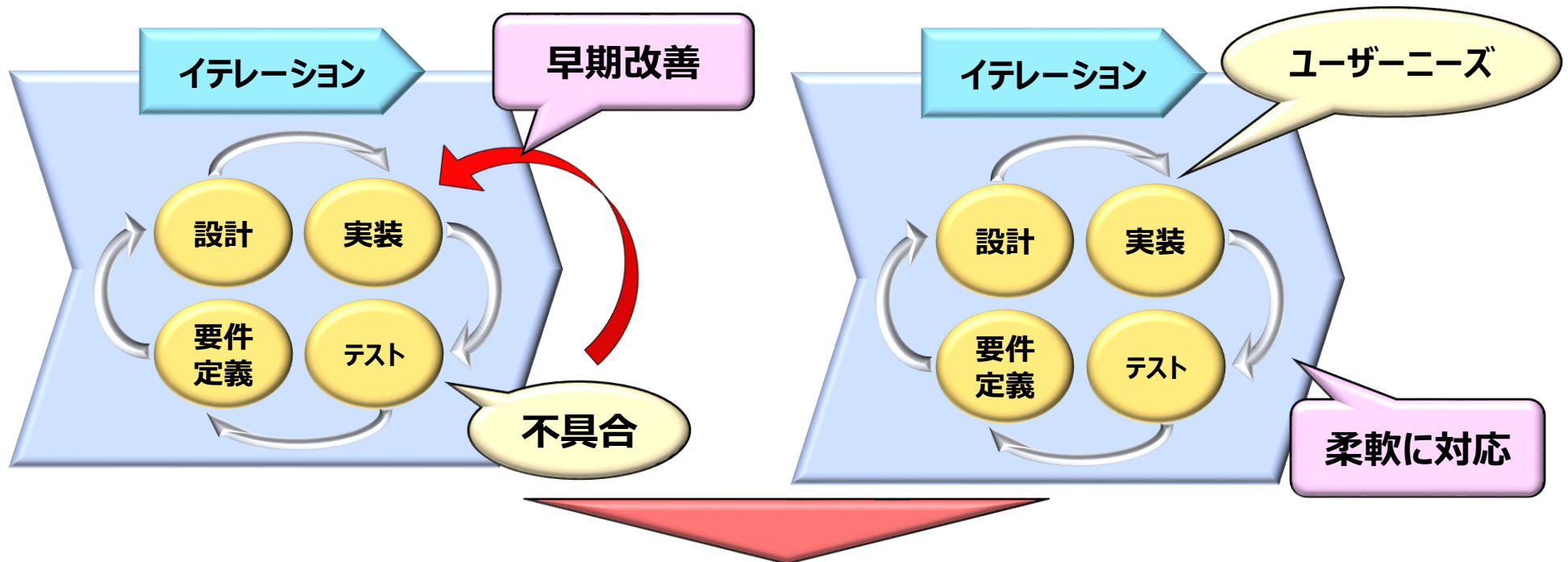
3. アジャイル開発のメリット

4. アジャイル開発の留意すべきこと

アジャイル開発のメリット

アジャイル開発では小さな単位で決定から設計、実装、テストを繰り返すので、不具合発生時には手戻り工数を少なくすることができ、効率的な開発ができます。そのため、ビジネス環境の変化に応じた改善や撤退といった判断を下しても、その影響を小さくすることが可能となります。

また、開発途中でユーザーとのコミュニケーションをとりながらフィードバックを行うので、デバイスや技術の急速な進歩、ユーザーのニーズの急速な変化などにも対応することができます。



早期改善や柔軟な対応により、高い満足度が得られる

1. なぜDX推進にはアジャイル開発なのか

2. アジャイル開発の特徴

3. アジャイル開発のメリット

4. アジャイル開発の留意すべきこと

アジャイル開発の留意すべきこと

開発に着手する前に、開発の当事者であるユーザ企業及びベンダ企業が共にアジャイル開発に関する適切な理解を有していることを確認し、その活用に対する期待を共有しておく必要があります。アジャイル開発では、ウォーターフォール型開発に比べて、ユーザ企業には開発に対するより深いレベルでの関与が求められます。

留意点

- ユーザー企業とベンダ企業の綿密な関係性を構築する
- 求められるそれぞれの役割や負担をあらかじめ明確に認識する
- ユーザ企業はどのような価値を求めるのか、また、それを実現するためのビジョンを明確にする
- 開発開始後もそのビジョンを維持・改善しつつ、ビジョンに基づく迅速な意思決定を行う
- 開発されるプロダクトとビジョンとの間のギャップをなくすことに力を注ぐ責任がある

アジャイル開発はウォーターフォール型の開発のプロジェクト運営と大きく違っており、プロジェクト運営で専門的知識や技術が必要になってきます。それを埋めるためには、アジャイル開発のプロジェクトマネジメントの知識を有した外部のメンバーを参画させることも検討してみてもはいかがでしょうか。

INTLOOPについて

さまざまな経営課題の解決を支援するコンサルティング事業を主軸に、テクノロジーを駆使しビジネスモデルの変革を目指すデジタルトランスフォーメーション事業、システムの開発・導入を支援するテクノロジーソリューション事業、専門性の高い人材をご紹介する人材ソリューション事業の4事業を柱に事業を展開。

常にお客様の視点に立つことを第一義に考え、お客様の課題に対して最適なソリューションを提供し続けています。

お問合せ

下記フォームよりお問合せください。

<https://www.intloop.com/contact/general/>

記載の企業ロゴデザインについて

記載している企業のロゴ、商標は企業が提示しているガイドラインを確認したうえで記載しています。デザイン、商標についての著作権は、それぞれの企業に帰属しています。

免責事項

この文書に記載されている情報は一般的なものであり、特定の個人や組織に対するアドバイスを提供するものではありません。掲載情報の正確さについてできる限りの努力をしていますが、その正確性や適切性を保証するものではありません。何らかの行動をとられる場合は、本資料の情報のみを根拠とせず、専門家による適切な分析・アドバイスをもとにご判断ください。当資料を用いて行う一切の行為、被った損害・損失に対しては当社は一切の責任を負いかねます。予めご了承ください。当資料の著作権は当社にあります。当資料の転載、流用、転売など、ダウンロードされたご本人様以外のご利用は固くお断りさせていただきます。